
スパヒロ学園

ボッスン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパヒロ学園

【Nコード】

N4144U

【作者名】

ボッスン

【あらすじ】

この物語はスーパーヒーロー大戦の作品達やスーパーロボット大戦の作品達や二つに出ていない作品達が繰り広げる学園物語です。キャラ崩壊があるかもしれませんが、気を付けてください。

プロローグ 始まりの朝（前書き）

ヒュッケバイン M k - 3 （M k - 3）「あれ？」

エクスバイン （エクス）「何ですか？ M k - 3。」

M k - 3 「作者さんは？」

エクス「作者は今ある事でいいんですの。」

M k - 3 「え？どういう事？」

エクス「この話で分かるんですの。それでは始まるんですの。後、修正
しましたですの。」

プロローグ 始まりの朝

それはある日の事だった。

俺はただ普通に学校に向かっていた。しかし、いつも行っている学校とは違う学校に。

俺の名はバナージ・リンクス。俺は彩南高校に通っている。

なぜ彩南高校に通っていないかって、理由はその学校が無くなったからと言うより爆発したからである。

理由はいろいろあつて、その後爆発した。

「おはよっス。バナージ。」

髪の色が紫の俺の先輩が俺に挨拶をした。

「おはよう。」

俺は先輩に挨拶した。その先輩はアラド・バランガ。俺と同じ彩南高校に通っている。因みに俺は高1でアラドは高2だ。学校が爆発した原因の一人はアラドだ。俺のその中に入っている。

アラドはある限定パンを食べようとした時に三人の少女の戦いと双子の兄弟の戦いなどのいろんな戦いに巻き込まれてその限定パンを失って怒りに狂い戦いに参加して、その後、俺はクラスメイトのオードリーが作った弁当を食べようとした時にその戦いで弁当の中身が灰になって俺が怒りでその戦いをやっている人達に攻撃して、そ

の衝撃で学校が爆発した。これが学校が爆発した理由だ。

因みにアラドはスケット団と似た部活のツインバード団に入っている。構成は、アラドとゼオラ先輩とクオヴレー先輩だ。アラドはその部の部長でリーダーだ。

「バナージ、どんな学校が楽しみっス！」

「ああ、そうだな。」

俺はアラドの言った事にそう答えた。

そして、俺とアラド先輩が着いた学校は、スパヒロ学園。この学園は、俺とアラドが通う高等部や中学部や小学部や大学部がある学園だ。本来、通っている学校が元に戻る間、俺とアラドが通う学校だ。

俺とアラドが下駄箱に着いた。俺とアラドは自分の下駄箱に行った。

俺が下駄箱で靴を入れる時

「おはようございます。バナージ。」

「おはよー、バナージ。」

髪の色がピンクでツインテールの女の子と長い髪で金髪の女の子が俺に挨拶をした。その二人は俺のクラスメイトだ。

「ヤミ、ナナ、おはよう。」

俺はヤミとナナに挨拶をした。髪の色がピンクでツインテールの女

の子がナナ・アスタ・デビルーク。長い髪で金髪の女の子は金色の闇。この二人は実は宇宙人だ。ナナはデビルーク人という人間の姿に悪魔の尻尾が付いている宇宙人で、ヤミは体内のナノマシンによって、髪の毛や腕など自分の身体のある器官を自在に変身させる能力を持っている。

ヤミもアラド先輩と同じく学校を壊した原因の一人だ。ヤミはナナの双子の妹と一緒にナナとナナの双子の妹の姉を止める為にやむ終えず戦った。

「すみません。バナージ。私とモモがプリンセスを止められなかったせいで大切なお弁当と学校が無くしてしまつて…。」

「あたしもうちの姉上が暴走してしまつて…」

ヤミとナナが俺に謝つた。

「気にするなよ。俺が学校を破壊したから。」

俺はヤミとナナにそう言つた。

「ほら、自分のクラスを見ようぜ。」

俺とヤミとナナは自分のクラス表を確認した。

「あたしとヤミとバナージはクラスは一緒ね。後、モモとオードリィとメアとミコットとタクヤも一緒。」

ナナは俺とヤミにそう言つた。

「そうか、クラスは1 - Dか。」

俺はクラス表で組を確認した。

「1 - Dに向かいます。バナージ、ナナ。」

ヤミは俺とナナに言った。

「ああ。」

「うん。」

俺とナナは返事をして、1 - Dに向かった。

俺とヤミとナナは1 - Dに行くと、いろんな人達が居た。

「ここが1 - Dか。」

俺とヤミとナナは教室に入った。

すると、俺とヤミとナナと同じ学校の制服を着た少年が一人、少女が二人居た。その人達は俺のクラスメイトだ。

「オードリー、ミコット、タクヤ。」

俺とヤミとナナは親友の方に向かった。

「バナージ、ヤミさん、ナナさん。」

俺とヤミとナナに気が付いたの二人の内一人の少女はは、ミコット・

バーチ。ミコットは俺のクラスメイトで幼馴染だ。

「俺たちと一緒にのクラスだな。バナージ。」

俺に言ったのは、タクヤ・イレイ。タクヤはMSに詳しい。タクヤも俺のクラスメイトで幼馴染だ。

「同じクラスですね。バナージ。」

俺に言ったのは、エメラルド色の瞳をした、オードリー・バーン。オードリーは俺が高校に入った時に転校してきたクラスメイトだ。俺の親友だ。

「ああ。」

俺はそう答えた。

「席は？」

俺はミコットに聞いた。

「席はこの紙に書いてあるよ。」

ミコットは席が描いてある紙を俺とヤミとナナに渡した。

「そうか、ありがとう。ミコット。」

俺は紙に書いてある通りに席に座った。すると、

「私と同じクラスね。」

隣の席の、化粧がいらぬ程度に整った顔立ちで、肩まで届く短めの茶髪に花飾りのヘアピン付けている少女が俺に話しかけてきた。

「君は？」

「私は御坂美琴。能力は超電磁砲^{レールガン}、よろしくね。」

俺の問いにそう女の子、御坂美琴さんは自己紹介をした。

「レールガン？」

俺は美琴さんの能力のレールガンに疑問を思った。

「あ、ごめん。私は電気を出す事が出来るの。こういう風にね！」

すると、美琴さんは突然、後ろに向いて右手で電気を出して、突然現れた茶髪のツインテールの女の子に電気を食らわせた。

「お…お姉様。」

その茶髪のツインテールの女の子はそう言うと、倒れた。

「ごめんね。話を止めて。そういえば君の名前は？」

「俺はバナージ・リンクス。」

俺は美琴さんの問いにそう答えた。

「よろしくね。バナージ君。」

美琴さんは俺に言う。

「よろしく。美琴さん。」

俺は美琴さんに言う。

「美琴でいいよ。」

美琴さんは俺にそう言う。

「俺もバナージでいいです。美琴。」

俺も美琴にそう言った。

「分かったよ。バナージ。」

美琴は俺にそう言った。すると、

「やっと、着いたぜ。」

一人の少年が言う。その言った少年は、ツンツンした短めの黒髪のものでそれ以外にはこれと言って特徴が無い平凡な容姿の少年と腰まで届く程の長いストレートの銀髪とエメラルドのような緑色の瞳、白い肌に小柄で華奢な体格で整った顔立ちをしており服装は常に純白の布地に金の刺繍が施され高級なティーカップに似た印象の修道服で、数十本もの安全ピンで布地を留めて着用している少女と俺と同じ学校の制服を着て、赤髪のおさげをしている少女が教室に入ってきた。その俺と同じ学校の制服を着た少女は俺のクラスメイトだ。因みにこの学園の規則で服装は自由だ。

「メア。その二人は？」

俺は赤髪のおさげをしている少女、黒咲芽亜に聞いた。メアはヤミの妹でヤミと同じ変身能力に加え、身体の一部を相手と融合してその精神に入りこむ精神侵入サイコダイブという能力を持つ。

「この二人は、私が道を迷った時に助けてくれました。」

メアはそう答えた。

「俺は上条当麻。当麻って呼んでくれ。」

少年の名は、上条当麻は俺に自己紹介をした。

「私はインデックスなんだよ。インデックスって呼んでほしいかもよろしくなんだよ。」

少女は、インデックスは同じく俺に自己紹介をした。

「俺はバナージ・リンクス。バナージって呼んでくれ。」

俺は二人に自己紹介をした。

「メアは本当に困ったぜ。俺とインデックスが学校に向かっている途中でメアに会って、道を尋ねた時にメアが持っていた地図は世界地図だったぜ。」

「え？」

当麻に言った事に俺は驚いた。

「何でメア、世界地図を持っていたんだ？」

「理由は学園に行く道が分からなくて、本屋さんに行っていっぱい載っている地図を欲しいって言ったら、この地図をくれました。」

俺の問いにメアはそう答えた。

「いっぱい載りすぎだよ？後、その地図でこの学園までの道が分かるのか？」

俺はメアにツツコミを入れた。

「あ、とうまと同じ事を言ったかも。」

インデックスは俺に言う。するとスピーカーに音楽が流れた。

『全生徒に継ぐ。全生徒はグラウンドに来たまえ。理事長の朝礼だ。遅刻した生徒は最初は許すが、女の子の場合は、ルーレットで決められたコスプレをする事、因みに例外もある。男の子の場合は人によつては女装だが、それ以外の人はライダーキックだ。もちろん例外もある。繰り返す。全生徒はグラウンドに来たまえ。理事長の朝礼だ。遅刻した生徒は最初は許すが、女の子の場合は、ルーレットで決められたコスプレをする事、因みに例外もある。男の子の場合は人によつては女装だが、それ以外の人はライダーキックだ。もちろん例外もある。理事長の朝礼はすぐ終わる。以上だ。』

スピーカーから放送が流れた。

「この声は、海東先生だな。」

俺はこの声を聞いてそう言った。海東大樹先生は俺の学校の先生だ。海東先生は何かを盗む癖がある。その為、門矢先生などの仮面ライダーの先生に怒られている。

教室に居る皆は、グランドに向かった。

そして、グランド。そこには、いろんな人達がいた。

「えー、まず朝礼を始めるぞ。理事長が朝礼が長いのは嫌だから、すぐに終わる。」

元の学校の俺の担任の先生で二眼レフのトイカメラを常に身につけている先生、門矢士先生がそう言う。すると、

「きゃー。」

みんなは棒読みで言った方を見上げると屋上にピンク髪のショートヘアスタイルで俺達と同じ学校の制服を着た少女が赤い兜と黒い服と白いマントを身に纏った姿の怪人に人質に捉えていた。ピンク髪のショートヘアスタイルの俺達と同じ学校の制服少女は俺の学校のクラスメイトだ。

「私はアポロガイストなのだ！この女が助けたければディケイド、門矢士を差し出すのだ！」

その赤い怪人、アポロガイストはそう言う。因みに、

「助けてー。」

棒読みで助けを求めているピンク髪のショートヘア女の子は、モモ・ベリア・デビルーク。俺のクラスメイトだ。後、モモも学校が壊れた原因の一人である。後、屋上に眼鏡とコート、フェルト帽が特徴の壮年の男が居た。

「さあ、ディケイド！お前のせいでこの女は…ぐふ？」

その男は言いかけた瞬間、アポロガイストと一緒にシアン色のバイクにひかれた。そして、シアン色のバイクに乗っていたシアン色の戦士がモモに向かった。

「大丈夫ですか？」

シアン色の戦士はモモにそう言った。

「あなたは？」

モモはシアン色の戦士に聞いた。

「僕は通りすがりの仮面…」

「おい、それは俺のセリフだ！」

シアン色の戦士が言いかけた瞬間、門矢先生が屋上に駆けつけてそう言った。他にも、剣立カズマ先生と小野寺ユウスケ先生と辰巳シンジ先生が屋上に来ていた。

「何ですか？士さん。僕だってあのセリフぐらい言わせてくださいよ。」

シアン色の戦士は門矢先生にそう言ったが、

「駄目だ！あのセリフは俺のだ！誰にも言わせん！」

門矢先生はシアン色の戦士にそう答えた。

「とりあえず、士さん達。この二人を任せました。」

シアン色の戦士はそのまま何処か行こうとしたら、モモがシアン色の戦士の手をつかんだ。

「待ってください。作者さん。」

モモがシアン色の戦士に言った。

「え？」

モモがシアン色の戦士に言った言葉に皆は驚いていた。そのシアン色の戦士の正体は作者だった。

「待ってください、モモさん。僕は通りすがりの仮面ライダー、デイエンドですけど。」（汗）

作者かっているシアン色の戦士は、仮面ライダーデイエンドだった。作者はモモにそう言ったが、

「駄目ですよ、作者さん。作者さんはまだバイクの免許を持っていますから、バイクに乗ったら駄目です。後、バイクで人をひいたら駄目です。」

モモは作者にそう言った。

「いや、だから…」（汗）

作者はモモに言い訳を言いかけた時、

「作者さん。お話があります。」

モモは作者を何処かに連れて行った。因みにその男とアポロガイストは門矢先生と小野寺先生と剣立先生と辰巳先生が仮面ライダーになって、倒しました。門矢先生は仮面ライダーディケイドで小野寺先生は仮面ライダークウガで剣立先生は仮面ライダーブレイドで辰巳先生は仮面ライダー龍騎になって、その二人を倒しました。

そして、

「えー、事件があつたが、目的どつりに朝礼を始めるぞ。」

門矢先生はその言う。

「（この学園の理事長は誰だろう？）」

俺はそう思った。すると、その人が現れた。

「えー、朝礼を始めます。」

その人の外見は、俺とアラドの先輩で二年前の姿のキラ・ヤマト先輩に似ていて、服装は何故かTシャツと短パンだった。帽子がアラドの別の学校に行っている友人で俺の先輩の藤崎佑介、ボッスンが

被っている帽子だった。ボッスンと同じくゴーグルが付いている。因みに帽子の色は青色だ。サングラスを掛けている。

その時、皆は驚いていた。何故ならその人は、

「理事長のボッスンです。僕の事を作者って呼んでください。」

作者だった。

ブログ 始まりの朝（後書き）

M k - 3 「えーっ？作者さんが理事長？」

エクス「すごいですの。」

M k - 3 「作者さんが理事長って大変な事になるけど、大丈夫なんですか？」

エクス「大丈夫ですの。後、質問コーナーがあるですの。」

M k - 3 「エクス姉さん。質問のルールは？」

エクス「質問のルールは一つの感想に付き一回ですの。」

M k - 3 「そうですか。次回の話は？」

エクス「次回の話は、朝礼とこの小説に出る作品達の紹介ですの。」

M k - 3 「皆さん、次回もよろしくお願いします。」

第1話 朝礼と言う名の参戦作品介绍（前書き）

エクス「今回はこの学園に出ている参戦作品の紹介です。この話は短いのです。」

Mk-3「この学園にどんな作品が出るのかな？」

エクス「この話で分かるのです。それでは、始めますです。」

第1話 朝礼と言う名の参戦作品紹介

前回のあらすじ。

理事長が作者だった。

「朝礼を始めます。」

と言う訳で、作者の朝礼が始まった。

「この学園はいろんな人達が学校が壊したり、無くしたり、いろんな事で学校を無くした生徒達や先生達の為の学校です。以上。」

作者の朝礼が終わった。

（本当に朝礼が直ぐに終わったな。）

生徒の皆はそう思った。すると、

「時間が余ったので、この学園の生徒達と先生達が出る作品を紹介します。」

作者は何時の間にかとても大きいディスプレイを出して、映像をながした。

参戦作品

スーパーロボット大戦シリーズに参戦した作品（追加有り）

スーパーヒーロー大戦に参戦した作品（1部は参戦しない予定です）

魔法少女リリカルなのはシリーズ（ゲームも含みます）

ガンダムシリーズ

魔法少女まどか マギカ

ハヤテのごとく！

灼眼のシャナ

ソニックシリーズ

これはゾンビですか？

とらドラ！

ゼロの使い魔

絶体絶命でんじゃらすじーさん

BLEACH

俺の妹がこんなに可愛いわけがない

銀魂

インストロッド英

IS

ケシカス君

涼宮ハルヒの憂鬱

プリキュアシリーズ

戦隊シリーズ

ウルトラマンシリーズ

NARUTO疾風伝

スーパーロボット大戦OGシリーズ（正確に言うとバンプレスト

オリジナル）（追加有り）

しゅごキャラシリーズ

ドラゴンクライシス！

Another Century's Episodeシリーズに

参戦した作品

A.C.E.オリジナル

けいおん！！

ひだまりスケッチ
緋弾のアリア
みつどもえ
ロザリオとバンパイア
こどものじかん
べるぜバブ
めだかボックス
? n ? g m ? 【エニグマ】
黒子のバスケ
P S Y R E N - サイレン -
D . G r a y - m a n
毎度！浦安鉄筋家族
e t c

とスタッフロールに映像が流れた。

「以上がこの学園の生徒と先生達が出る予定の作品達です。後、とても面白い作品が出ましたら、その作品を追加追加します。」

作者はそう言う。

「これで朝礼を終わります。後、終業式も終わります。教室に戻りましたら、すぐに帰ってもいいです。」

作者は皆にそう言って、朝礼と終業式を終わらせた。

「（この学園は大丈夫かな？）」

皆は作者を見て思った。

第1話 朝礼と言う名の参戦作品介绍（後書き）

Mk-3「この作品達がこの学園に出るんだね。エクス姉さん。」

エクス「そうです。後、作品を募集していますです。」

Mk-3「エクス姉さん。ルールは？」

エクス「オリジナル作品でもOKです。但し、作者が知らない作品は参戦する確率は低くなりますのでご注意ください。」

Mk-3「後、スパロボとスパヒロに出ている作品が分からない人は、スパロボはwikiでスパヒロは作者が書いています、スーパーヒーロー大戦で参戦作品を見るとその参戦している作品が分かります。」

エクス「次回の話は、バナージ達のクラスの話をする予定です。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4144u/>

スパヒロ学園

2011年11月17日18時16分発行